

城下町探訪 40

2009/1/7

やこういなり 夜光稲荷は今どこに

1 夜光稲荷伝説

松本市史（昭和8年刊）に夜光稲荷伝説が掲載されている。大名町西側板橋家の邸内に夜光稲荷が祀られているが、この社は、戸田丹波守康長が大坂の陣で天王寺の夜の戦いで、敵と組み合っ^{やしろ}て溝におちてしまった。これを見た板橋兵左衛門が鐘を引っ提げて駆けつけて主人を救わんとしたが夜のことで敵味方を見分けることが出来ない。「丹波殿は上か下か」と問えば駆けつけた仲間は「上なり」と答え、外の者は「いや下なり」と答えるありさまで兵左衛門が躊躇していたそのとき、突然、空中に火の玉が現れ真昼の如く辺りを照らした。その光で組み敷かれているのが康長公であったので即座に上の敵を討ち取って主人を救う事ができた。それ以来、板橋家はこの不思議な現象を崇め、夜光稲荷として邸内に祀った。社殿は荘厳で板橋家が松本を離れる大正末年まで存在した。



板橋家が松本を離れるとき夜光稲荷と、その祭祀を百瀬家に託しました。現在大手 2-19 に百瀬家屋敷神として廃仏毀釈によって配された弥勒院にあった殿様のお稲荷様と弁財天の祠、百瀬家の東山福竜大明神とともに合祀されている。西堀通りの西堀公園前の旧井上百貨店北の小路を西に入り右手にある。

2 板橋家家系

板橋家の家系を示す文書を見ると、板橋家は慶長19年 板橋兵左衛門正吉が戸田康長に常州笠間において80石で召し抱えられている。大坂の陣についての板橋家の記録は「○同年冬（慶長十九年）康長様撰州大坂御陣之時御供」とあり、翌年の大坂夏の陣のことは書かれていない。夜光稲荷伝説が伝える様な康長救出の手柄は当然書かれているはずなのに1行も見あたらないのである。記録は続いて「○元和四年 戊午四月八日五拾石御加増」とありその次ぎに驚くべき事が書かれている。「○^{げん な} ^{つちのえうま} 元和四年 戊午四月八日五拾石御加増」とありその次ぎに驚くべき事が書かれている。「○^{たびたびごかぞう} ^{つちのとみ} ^{つごう} 度々御加増、寛永六年己巳、都合千石。御年寄役相勤る」

すなわち、仕官したのが慶長19年、80石で召し抱えられた板橋兵左衛門正吉がそれから16年後、1000石に出世し、年寄役を勤めるまでになっているのである。板橋家は戸田家にとって三河以来の譜代ではない康長が笠間3万石時代に召し抱えた家来である。当時1000石以上の家臣は家老の野々山家（1500石）と林忠左衛門家（1000石）だけである。この破格の出世は藩主康長との密接な関係と板橋兵左衛門の力量によるものと推測される。この板橋家の急激な隆盛に対して譜代の家来の中には快く思わなかった人達がいたことは

想像にかたくない。夜光稲荷伝説はそのような状況の中で藩主を大坂の陣の時に助けたという特別な関係を際立たせるために生まれてきた伝説とも考えられる。

笠間に於いて召し抱えられた家来は以下のようなようである。最初決して板橋家は高禄で召し抱えられたわけではない。

氏名	仕官年	年齢	仕官時石高	先主
板橋兵左衛門正吉	慶長19	—	80石	祖先平氏 板橋兵左衛門親棟
神谷清左衛門久吉	慶長19	25	80石	松平越中守
玉生駒勘兵衛完次	慶長19	35	100石	越前宰相松平忠昌
星合市兵衛政則	元和元	—	200石	—
宇野庄左衛門政則	元和元	—	250石	松平和泉守親桑
綿貫八太夫	— (笠間)	—	—	—

3 狐と光

狐が光を発するという狐に対する考え方は既に鳥羽僧正の鳥獣戯画の中に見られるのは周知の所である。(写真参照)

狐と「光」あるいは「火」との関係を民俗学的に解き明かしている吉野裕子氏の説を紹介する。※ (「狐」 法政大学出版局 吉野裕子著)

狐の民俗について中国から入ってきた陰陽五行説で説明している。陰陽五行説はこの世は5元素で構成されているとする。すなわち「木・火・土・

金・水」である。このあいだには循環の関係があり、木はこすれ合うと火を生じ、火は物を燃やして土を生じる。土は掘っていくと金属がとれ、金属は空気中に置いておくと表面に水を生ずる。水は木を育てる。この様に各元素が次々に循環するというのである。これを「木生火」「火生土」「土生金」「金生水」「水生木」という。中国で生まれたこの哲学は農業を「土」(土気)にあてている。農業の神様の使いを色の似ている「狐」としています。(日本の農業の神様のお使いは蛇です。)



ここでお稲荷さんの鳥居が赤い訳を吉野裕子氏は「火生土」の原則に基づき、農業の豊作を祈るには狐にパワーを送らなければいけない。そのためには「土」を生んだ「火」の色を狐の廻り置くことで元気が出るはずだ、こういう考えから稲荷の鳥居は赤いのだと説明しています。

所がこの夜光稲荷伝説では狐が光り(火)を生んでいます。これだと「土生火」になってしまいます。実際この様な本末転倒が平安時代から起こっているといえます。私たちも子供の頃「狐の嫁入り」の話を聞かされました。これは全国各地にこの様な伝説があって狐火とか狐の桃燈と呼ばれています。狐火が連なって嫁入り行列の桃燈のようにみえる現象をいいます。これは狐が火を生ずると信じられていたことから生まれた事だろうと思います。

江戸中期の平戸藩主松浦静山（まつら・せいざん）が著した「甲子夜話」（東洋文庫）にも狐や狐火の話がいくつか登場し、「東本願寺が自火により焼失したのは、別荘を造るため、狐穴を埋めその上にあった祠を別に移した。すると東本願寺の巨宇大屋諸々の房舎一斉に発火したという。天魔の所為か狐の神通力かなど言う者ありしと」（「甲子夜話四十八卷・二十一東本願寺の狐災」）ここでも狐が火を生むという事が信じられている。冷静な知識人である静山も大いに関心を示している。この様に近世の人々が「狐生火」を信じていたことを背景に夜光稲荷伝説が成立してくると考えます。

3 戸田康長を救った話は「近藤家」の出身記にも書かれている

さて、近藤兵右衛門（後三左衛門）正次（550石）は元和元年大坂夏の陣天王寺口の戦いの時、康長が3人の敵と戦い疵を負わされ危なくなった時、正次が駆けつけ康長を救った。康長が一人の敵を突き正次が横から敵の首をはねた。と書かれている。笠間へ帰城後、加増の話があったが縁者に不都合が有りこれを受けていない。

また、この時のことを戸田家の「戸田系譜全」で見ると「(康長)自ら鎧をにぎりて奮戦し一人、敵の数人に当たりその身傷つくところ三ヶ所、既に危なかりしに家臣近藤兵右衛門正次来たり救ふ。康長ついに敵の一人を斃す、正次その首を斬る時に、稲垣重種馳せ来たり馬上より鎧を投げて一人を斃す。・・・」とあり、近藤兵右衛門正次が康長を救ったことが記されている。したがって天王寺口で戸田康長を救出したのは近藤兵右衛門であったことは間違いが無いと思われる。夜光稲荷の伝説の板橋兵左衛門とおなじような場面であるが、戸田家の家系譜に載っているのであるから近藤兵右衛門の話は信頼が置けると思われる。

この真実を知っている譜代の家臣の後裔達にとっては夜光伝説は受け入れがたかったのではないだろうか。

4 板橋家の祖先は板橋城主

板橋家の板橋は中山道の宿場「板橋宿」と無関係ではない。また「日光道中壬生通り」の「板橋宿」とも無関係では無い。平成20年9月 日光市板橋の郷土史家田辺博彬氏から板橋兵左衛門家についての質問を頂き2回調査に来松され文書調査並に墓所の調査をされた。

以下田辺氏の著書「日光山麓の郷 板橋の歴史」から板橋兵左衛門が康長の仕官に至る経過を要約引用させて頂く。※この板橋は現在日光市板橋である。中山道板橋宿は現在東京都

『板橋氏は桓武平氏の出である。板橋城主板橋将監親棟の祖先は平良文で武州村岡に住んでいました。その子孫太郎太夫親盛は小田原の北条氏に属し豊島郡板橋に住み板橋因幡守と名乗りました。その子が板橋将監親棟である。板橋将監は北条氏傘下にあつて板橋城主（現日光市板橋）となり一帯に勢力を張りました。小田原の合戦には北条氏方に、下野の壬生義雄の下に参戦し、破れて板橋将監は板橋城に戻り秀吉と家康に恭順して出家し文禄3年に没した。』

「板橋将監には一人の男の子がいました。**長男の行常**は、父親棟にしたがって板橋城に移ってきて、板橋将監と行動をともにしました。**次男の親恒**は幼かったため武蔵国に留まりました。親恒の子孫は、江戸で旗本や板橋宿名主として長く繁栄しています。

板橋将監の死後、板橋城に残っていた子行常は孤立をよぎなくされ、**嫡子行武**をつれて妻の縁をたよりに**武州勅使河原城**へ落ちのびました。行常は迎えられて城主の名代となり、名も勅使河原喜請等行常と改めましたが、その後、行常は妻と死別したため、出家して荒廃した板橋に戻り晩年を静かにくらししました。寛永 12 年(1635)にその生涯を終えました。

また行常の子**行武**は、母方の録から勅使河原五郎右衛門と称し、勅使河原にとどまりました。行武はその後、再び板橋大隅守と名のりましたが、のちに常陸国笠間に移り、仏門に入って道全入道正高と称しました。そして元和 4 年(1618)に死去、笠間の鳳台院に葬られました。

行武の子の兵左衛門正吉は折から笠間城主であった松平丹波守康長(戸田康長)に仕官しました。

戸田康長は、その後移封をかさね、元和 3 年(1617)に信州松本城に移りました。

戸田康長は元和 2 年(1616)、高崎城主のとき、東照大権現廟造営手伝いを命ぜられ日光に赴いており、さらに信州松本城のときの元和 5 年(1619)には、三代将軍徳川家光の日光杜参に供奉しています。

福生寺にある位牌は板橋将監親棟の四代目の後裔で戸田康長につかえていた板橋兵左衛門正氏が、主君の日光参詣の折随行し、その途中で先祖ゆかりのこの地に立ち寄り、祖先の墓に詣で、位牌を福生寺に納めて供養したものとみられています。

また、東京都板橋区板橋本町にある智清寺には、江戸時代を通じて中仙道板橋宿の名主役をつとめた板橋市左衛門の墓所があり、そこには「孝誉源忠居士 慶安二己丑年六月三日板橋氏立之」と刻まれた五輪塔が建っています。

この法名は板橋将監その人であり、慶安 2 年(1649)にその後裔である板橋市左衛門が板橋将監の霊を供養するため建立しました。

戦国時代に、板橋の名の起源があり、この地、板橋で大いに勢力をふるった板橋城主板橋将監親棟がいたことは、後世に伝えたい板橋の大きな歴史です。』

板橋笠間において 80 石で召し抱えられた板橋兵左衛門正吉の出自について、板橋城主板橋将監親棟の後裔であり板東平氏に連なる家柄のもつ尊貴性が彼の實力とともに戸田康長と親密な関係を形作っていく要素となったのではないかと考えます。

享保十二年秋改松本城下絵図→

